

## 尋常性狼瘡ニ就テ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/30713">http://hdl.handle.net/2297/30713</a>

原 著

尋常性狼瘡ニ就テ

金澤醫學專門學校皮膚科教室(主任土肥博士)

多 川 幹

一、緒 論

尋常性狼瘡ハ又ウイラン氏狼瘡 Lupus Willan 結核性狼瘡 Lupus tuberosus 或ハ狼瘡性結核 Tuberculosis Imposta ト稱シ結核菌ノ侵入ニヨリテ皮膚或ハ粘膜組織ニ境界明劃ニシテ特有性ヲ帶ブル浸潤所謂狼瘡結節ナルモノヲ形成シ、該結節ノ變性ニヨリテ種々ノ病型ヲ呈スル慢性傳染性皮膚疾患ナリ。

成書ヲ按ズルニ本症ハ歐洲ニハ極メテ多キ疾病ナルモ、幸ニ本邦ニハ稀有ニシテ之ヲ我教室ノ統計ニ見ルモ新來患者ノ僅カニ〇・二三%ニ過ギズシテ、彼ノ歐米ノ統計クローカー氏ノ一・八%、カボジ氏ノ一・六%、ルロアー氏ノ四・九九%、伯林大學皮膚科教室ノ五七%、デュリング氏ノ〇・三%、ボルクレー氏ノ〇・三四%ニ比スルニ遙ニ少數ナリ、然レドモ年々増加ノ傾向アルヲ遺憾トス。

抑々狼瘡 Lupus ナル語ハ素ト俗間ヨリ出デテ醫學ノ術語トナリシモノニシテ、始メハ種々ノ異症ヲ含有セリト雖ド

(511)

モウイラン、パーテマン二氏ノ研究ニヨリテ始メテ其意義一定スルニ至レリ。次デアリペール、フックス氏等ノ研究アリタレド其意ヲ充タスニ足ラズ、終ニヘブラ氏ハ病理學上精細ナル研究ニ基キ左ノ如ク分類セリ。

- (一) 落屑性狼瘡 *Lupus exfoliativa*
- (二) 肥大性狼瘡 *Lupus hypertrophicus*
- (三) 潰瘍性狼瘡 *Lupus ulcerosa*

一方マルチン氏等ニヨリテ狼瘡結節ナルモノ認定サレ、更ニウィルヒョウ氏等ノ病理學的研究及ビコッホ氏ノ細菌學的研究アリ、次デヘブラ、カボジ一氏等ノ詳細ナル臨牀的研究ト相待チテ現今ノ尋常性狼瘡ノ意義確定スルニ至レリ。嘗ツテベルツ、スクリッパ氏等ハ狼瘡ハ我國ニハ存在セズト云ヘルモ、一八九八年土肥博士始メテ之ヲ發見シテ以來河本、土肥、松尾氏等ノ報告陸續トシテ出デ、今ヤ本邦ニモ決シテ少ナカラザル疾患トシテ諸家ノ注意ヲ引クニ至レリ。余ハ大正二年我皮膚科教室ノ獨立シテヨリ大正九年ニ至ル八ケ年間ニ於ケル外來患者總數一萬七千三百九十八名ヲ調査シ本症ノ二十三例ヲ得タルヲ以テ以下其ノ一般ヲ記載シ併テ統計的研究ノ概略ヲ述ベントス。

左ニ本邦各大學ノ統計ニ表ハレタル尋常性狼瘡患者數ヲ掲ゲテ參考ニ供スベシ。

第一表

報告者	尋常性狼瘡患者數	外來患者總數	外來患者ニ對スル百分比	期 間
東京大學皮膚科	三二	三〇三九〇	〇・一〇五%	明治三十一乃至明治四十年
京都大學皮膚科	三〇	二三〇三七	〇・一三〇%	明治三十六年乃至明治四十二年
九州大學皮膚科	六〇	四六八二六	〇・一二八%	明治三十九年十一月二十日乃至大正八年三月廿日
大阪大學皮膚科	一五	二四五九六	〇・〇六一%	明治三十六年乃至明治四十二年
金澤醫專皮膚科	二三	一七三九八	〇・一三二%	大正二年乃至大正九年

二、症 例

第二表 (症例一覽表)

番號	患者姓名	年齡	初診年月日	性別	職業	初發年齡	發生部位	結核性合併症	結核性素因	既往及現病歴	治療	轉機	組織的検査	備考
23	尾山某	一一	同 年十月三十日	女	小學生	七	右頰部及左下頰部	結核性	+	生來頑強ナリシガ五歳ノ頃ヨリ左上頰部ニ頑固ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	切除、頑皮	全治	頰部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
22	北村某	四〇	同 年七月十二日	男	農業	一〇	兩手背及頰下部	皮膚疹病	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
21	高木某	六	同 年五月十九日	女	農業	五	右頰部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
20	前川某	三四	同 年九月八日	女	織業	三五	左頰部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
19	岸本某	三〇	同 年七月十六日	女	無職	一五	右頰部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
18	中村某	一九	同 年七月十六日	女	無職	一五	右頰部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
17	八田某	二八	同 年七月四日	女	女工	二五	右手背及前腕部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
16	太田某	一五	同 年三月廿五日	女	學生	一〇	右頰部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
15	新井某	一七	同 年五月五日	女	小間物業	七	頰部及頰下部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
14	今村某	五	同 年十一月廿一日	女	農業	一	右手背及右耳翼部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
13	倉重某	一〇	同 年七月廿八日	男	小學生	四	右頰部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
12	和方某	二四	同 年七月廿八日	男	農業	五	左内股部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
11	寺田某	四二	同 年八月四日	男	無職	四一	右觀骨部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
10	黒田某	二四	同 年七月廿八日	男	軍人	二〇	左觀骨部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
9	舖某	三一	同 年七月廿八日	男	農業	三一	左觀骨部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
8	中島某	二一	同 年七月廿八日	男	農業	三一	左觀骨部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
7	池崎某	三一	同 年七月廿八日	男	農業	三一	左觀骨部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
6	上田某	一九	同 年七月廿八日	女	湯屋業	一七	右中隔及鼻翼部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
5	吉本某	四三	同 年七月廿八日	女	彫刻業	一五	右中隔及鼻翼部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
4	伊藤某	二五	同 年七月廿八日	女	無職	二四	右中隔及鼻翼部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
3	窪田某	五三	同 年七月廿八日	女	無職	三	鼻尖、頰部及頸部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
2	大上某	一八	同 年七月廿八日	女	料理屋業	一七	鼻尖、頰部及頸部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	
1	山本某	四一	同 年七月廿八日	男	農業	五	左上頰部	核症	-	生來健康ニシテ著患ヲ知ラザリシガ昨年頰部ニシテ治癒シ難キ皮膚疹ヲ生ズ	「ピロガルス」酸軟膏	全治	鼻背部ヨリ組織ノ一片ヲ切除ス	

大正二年九月十日  
八日第五回金澤  
病院集談會ニテ  
小原氏報告

### 三、臨床的症狀

尋常性狼瘡ニ特有ナル狼瘡結節ハ粟粒大乃至麻實大ノ皮膚中ニ埋没セル黃褐色乃至褐赤色ノ浸潤ニシテ境界明劃ナリ、指又ハ硝子板ヲ以テ壓スルモ褪色セズ、却ツテ之レガ爲メニ血液ヨリ來ル周圍ノ着色消失スルヲ以テ特有ノ狀態著シク現出シ來ルヲ恒トス。而シテ觸レバ僅カニ抵抗アリ、試ミニ消息子ヲ以テ其ノ部ヲ壓抵スレバ柔軟ニシテ易ク穿孔シ得ベシ。該結節ハ特有ナル病的形成物ニシテ狼瘡ノ原發疹ナリトス。蓋シ狼瘡ノ種類頗ル多シト雖ドモ盡ク此原發疹ノ集成ニ因ルモノトス。原發疹ノ單立シ或ハ集簇シ、他ニ皮膚ノ變化ナク自覺症モ無クシテ其儘ニ經過スル型ヲ斑狀狼瘡 *L. maculosus* ト云ヒ、散在スレバ播種狀狼瘡 *L. disseminatus* ト稱ス。經過甚ダ緩徐ニシテ狼瘡浸潤退行變性ヲ起シ表面菲薄トナリ薄キ鱗屑ヲ作ルヲ落屑狀狼瘡 *L. exfoliativa* ト云フ、其部更ニ萎縮シテ癩痕ヲ形成スルヲ退縮性狼瘡 *L. resolutivus* ト云フ、結節若シ中央癩痕ヲ以テ治癒シ一方ニ進行スル時ハ蛇行狀狼瘡 *L. serpiginosus* ナリ。此癩痕中ニハ尙多少ノ狼瘡疹殘存シ早晚其ノ數ヲ増シテ再ビ破潰ス、之レ狼瘡性癩痕ノ特長ナリ。其他増殖性又ハ高度ノ退行性變化ヲ起シ固有ノ結核性病竈ノ外ニ周圍ノ結締織次デハ上皮層ノ増殖肥大ヲ來タシ皮膚表面ヨリ隆起スルコトアリ、之ヲ結節性又ハ肥大性狼瘡 *L. tuberosus s. tumidus* ト云フ。更ニ乳嘴ノ結締織増殖シ上皮モ之ニ加ハル時ハ腫瘍狀ヲ呈ス、之ヲ増殖性乳嘴狀疣狀狼瘡 *L. hypertrophicus papillaris verrucosus* ト云フ、鞏皮様肥厚ヲ以テ治癒スルモノヲ硬化性狼瘡 *L. sclerosus* ト云フ、若シ崩潰シテ潰瘍ヲ作レバ破潰性狼瘡 *L. exulcerans* ナリ、狼瘡性潰瘍 *Lupusgeschwür*, *Ulcus luposus* ハ底面弛緩セル肉芽ニテ被ハレ柔軟ニシテ出血シ易ク、不規則ナル乳嘴狀ヲ呈シ、狼瘡性浸潤ヲ有スル邊縁ヨリ成リ、多少稀薄ナル膿漿ヲ分泌シ、乾燥シテ時ニ黃褐色又ハ汚穢色ノ厚層ノ痂皮ヲ形成スルコトアリ。狼瘡ハ自覺症狀ヲ伴ハザルヲ普通トスレドモ時ニ輕度ノ疼痛或ハ癢痒ヲ訴フルコト有リ。

### 四、發 生 部 位

諸氏ノ實驗報告ニ因ルニ本症ノ好發部位ハ顔面ニシテ殊ニ鼻、頰、上唇、耳朵ニ多シ、次デハ四肢、頸部、軀幹ノ順序ニシテ粘膜ニモ亦發生スルコト少ナカラズ。然レドモ有髮頭部ノ犯サルコトハ稀有ナリ。顔面ニアリテハ好ンデ鼻部ヲ犯ス。最初ハ粘膜ヨリ發シ次デ前面ニ波及シ遂ニ軟骨部ヲ犯ス。骨質ハ末期ニ犯サルルモ鼻尖鼻翼ハ初期ニ犯サレ、醜形ヲ來スコト甚シ、之ヨリ口唇頰部等へ蔓延シ或ハ該部ニ原發シ遂ニハ癩痕收縮ヲ起シテ眼瞼外翻症、口狹症ヲ來ス。耳ニ發生セルモノハ耳殼ノ破壞ヲ見ルコト有リ。頸部軀幹ニハ蛇行性ノモノ多ク、四肢ニ來ルモノハ好ンデ疣狀ヲ呈ス。四肢ノ如キ其皮膚ノ大部分犯サル時ハ機能障礙ヲ來ス、殊ニ腱、骨膜、關節及ビ骨實質ニモ達スル時ハ強直ヲ起シ、稀レニハ趾節脱落シテ所謂切斷性狼瘡 *L. mutilans* トナル。粘膜モ亦好發部位ニシテ鼻粘膜、口腔粘膜、眼瞼結膜、咽頭、喉頭粘膜等ニ於テハ或ハ原發シ或ハ續發ス。即チ灰白色ノ浸潤ヲ呈シ上皮剝脱セバ容易ク出血スル瀰蔓性肉芽面ヲ表シ、増進スルト共ニ癒着ヲ來シ、一方ニハ骨膜骨質ヲ犯シテ穿孔ス。今之ヲ余ノ報告例ニ於テ見ルニ第三表ニ示スガ如ク實ニ大半ハ顔面ニシテ十七例ヲ占メ、次デ上肢、頸部、下肢、胸部ノ順序ニシテ諸家ノ實驗ニ一致ス。

第三表 (尋常性狼瘡ノ發生部位ノ關係)

顔面 (一七)		軀幹 (五)			上肢 (五)			下肢 (三)	
鼻	頰	其他ノ 顔面	頸部	胸部	上膊	前膊	手	臂部	上腿
四	一一	五	五	一	一	三	四	二	一
									下腿 及足

五、經過

尋常性狼瘡ノ經過ハ極メテ緩慢ニシテ數年乃至數十年持續ス。今余ノ實驗例ニ就テ之ヲ見ルニ大約次ノ如シ。

一年乃至十年

十六例。

- 十一年乃至二十年 二例。
- 二十一年乃至三十年 二例。
- 三十一年乃至四十年 二例。
- 四十一年乃至五十年 一例。

狼瘡ニ於テハ個々ノ結節或ハ浸潤ガ異常ニ緩慢ナル經過ヲ取ルニ非ズシテ主トシテ新病竈ガ相持續シテ發生シ、種々ノ退行狀態ヲ呈シ終生治セザルヲ常トス。時ニ限局シテ癩痕様萎縮ヲ營ミ一時治愈スルコト有リト雖ドモ、幾クモ無クシテ再發スルモノナリ。

ウイヒマン氏等ノ統計ニ依ルモ概シテ本症ハ成年期以前ニ多ク、余ハ初年期ニ於テ發生セルモノヲ實驗セリト雖ドモラウドニツツ、ブロック、レノー氏等ノ云フ如ク何レノ年齢ニモ來リ得ルモノニシテノイマン氏ハ六十七歳ノ老年ニ發生セルヲ實驗セリト云フ。

本症ト男女性ノ關係ニ就テハヤダソン、ベッケル氏等ハ女子ニ多シト云ヒ、土肥章司氏ハ著シキ差異ヲ認メズト云ヘリ。然レドモ余ノ調査ニヨレバ二十三例中十五例ハ女子ニシテ男子ハ八例ニ過ギズ而シテ我外來ヲ訪フ男女患者數ノ比ハ三對二ナリ之ヨリ見レバ女子ニ多キガ如シ。

第 四 表 (尋常性狼瘡ノ發生年齢及性ノ關係)

性	年齢		合 計
	男	女	
至一歳乃至十歳	四	七	一一
至十一歳乃至二十歳	一	五	六
至二十一歳乃至三十歳	〇	三	三
至三十一歳乃至四十歳	二	〇	二
至四十一歳乃至五十歳	一	〇	一
至五十一歳以上	〇	〇	〇
合 計	八	一五	二三

狼瘡患者ニシテ長ク健存シ高齡ニ達スルモノアリ或ハ初メヨリ身體虛弱ニシテ結核性素因ヲ有シ或ハ他ノ結核性合

併症ヲ有スルモノモ少ナカラズ。即チ余ノ例ニ於テハ素因ノ明カナリシモノ四例ニシテ六例ニ於テ結核性合併症ヲ證明シ得タリ。

## 六、病理解剖

狼瘡ハ皮膚局所ノ結核ニシテ境界明劃ナル肉芽組織ヨリ成ル。今狼瘡結節ヲ顯微鏡下ニ見ル時ハ皮下或ハ真皮ノ深層ニ殊ニ血管ノ周圍ニ於テ境界明劃ナル單核圓形細胞ノ浸潤層アリ、其中ニ多數ノ上皮様細胞及ビ數個ノラングハンス氏型巨大細胞存在シ、其構造全ク粟粒結核ニ一致スルモノナリ。

狼瘡結節ノ發生ハ先ヅ血管内外被細胞ノ増殖ニ始マリ或ルモノハ限局性小圓竈ヲ作り、或ルモノハ廣ク犯サル狼瘡結節ハ真皮中ニ發生シ上皮層ハ通常健康ナリ。初メハ狼瘡結節ノ周圍ニ尙彈力纖維存在スルモ末期ニハ壓迫破壞サレ病竈ノ中心ハ乾酪變性ヲ呈スルニ至ル更ニ病竈ハ上方ニ向ツテ増進シ爲メニ上皮層ハ菲薄トナル之臨牀上ノ落屑性狼瘡ニ一致ス、更ニ進行シテ上皮層破壞スレバ潰瘍性トナル、更ニ病變深部ニ波及シ汗腺筋及ビ骨ヲ侵ス、時ニ狼瘡ガ若キ結締組織ヲ以テ治癒スルコトアリ。

狼瘡組織ニ結核菌ヲ發見スルコトハ極メテ困難ニシテ、數十枚ノ切片ヨリ僅カニ一、二ノ菌ヲ認ムルヲ普通トス。時ニ病勢經過ノ甚ダ迅速ナルモノニ於テ稍々多數ニ見出シ得ルコトアルモ、多クハ巨大細胞内ニ含有セラル。予ハ第四例、第十二例、第十六例、第廿例、第廿三例ノ五例ニ於テ組織的檢索ヲ行ヘルヲ以テ、以下之ニ就テ記載セントス。

### 第四例。(伊藤某女)

上皮層ハ肥厚シ、上皮索ハ著シク延長分岐シ、一部顆粒層ノ著シク増殖セルヲ見ル。主ナル變化ハ真皮ノ上層ニアリ、病竈ハ單核圓形細胞ノ浸潤ニシテ中央ニ上皮様細胞ノ集簇セルヲ認ム。又上皮様細胞群中ニハ數個ノ定型のラングハンス氏巨大細胞ヲ見ル。圓形細胞浸潤ハ血管及ビ汗腺排泄管ニ沿ヒテ稍々真皮ノ深部ニ及ビ、汗腺々體周圍モ犯



ナル。圓形細胞浸潤部ノ諸處ニ延長セル上皮索ノ横断面ヲ見ル。

### 第十二例。(若田某男)

上皮層ハ肥厚シ、薄キ角質層ヲ被ル、顆粒層ハ増殖セズ、上皮索ハ延長シテ深ク真皮中ニ侵入ス。單核圓形細胞ノ浸潤ハ真皮ノ上層ヲ占メ、圓形細胞浸潤層ト上皮層トノ間ニハ比較的細胞浸潤ノ少ナキ薄層ヲ認ム。病層邊緣ハ單核圓形細胞ヨリ成リ、中央ニ進ムニ從ヒ上皮様細胞ノ集簇セルヲ認ム。二三病竈ノ中央ニ於テ乾酪様變性部アリ、顆粒狀ヲ呈シ「エオジン」ニヨリテ赤色ニ染色ス、且ツ數個ノラングハンス氏巨大細胞ヲ上皮様細胞群中ニ認ム。

### 第十六例。(太田某女)

上皮層ノ肥厚ハ著明ナラズ、上皮索ハ稍々延長膨大シ、角質層ヲ認メズ。真皮ノ上層及ビ中層ニ達スル單核圓形細胞ノ浸潤アリ。浸潤ハ稍々瀰蔓性ニシテ局面ヲ形成セズ。病竈ノ中央ニハ少數ノ上皮様細胞アリ、又二三ノ定型的ラングハンス氏巨大細胞ヲ認ム。周圍トノ境界ハ極メテ不明瞭ニシテ別ニ乾酪變性層ヲ認メズ。

### 第二十例。(前川某男)

上皮索ハ少シク延長スルモ上皮層ノ肥厚ヲ見ズ。病竈ハ上皮層ノ直下ヨリ真皮ノ下層ニ及ビ、瀰蔓性ノ細胞浸潤ヲ認ム。細胞ハ主トシテ單核圓形細胞ヨリ成リ、其他紡錘形或ハ長圓形核ヲ有スル細胞アリ、二三ノラングハンス氏巨大細胞ヲ認ム。病竈ノ周圍ハ境界不明瞭ニシテ多數ノ幼弱ナル結締組織細胞アリ、乾酪變性ヲ見ズ。

### 第二十三例。(尾山某女)

上皮層ハ肥厚シ、上皮索ハ少シク延長肥大ス。往々圓形細胞ノ上皮層内ニ侵入セルヲ見ル。角質層ヲ見ザルモ不全角化セル薄層ヲ被ル。細胞浸潤ハ上皮層直下ヨリ真皮ノ中層ニ達シ、間々下層ニ及ブ。浸潤ハ主トシテ單核圓形細胞ヨリ成リ、中ニ多數ノ上皮様細胞ヲ認ムルモ定型的巨大細胞ヲ認メズ。乾酪變性モ見ズ、周圍トノ境界ハ不明瞭ニシテ、細胞浸潤ハ瀰蔓性ニ周圍ノ組織ニ波及シ、真皮上層ノ血管ハ著シク擴張ス。

## 七、原因動物試験

尋常性狼瘡ノ原因ノ結核菌ナルコトハ今日一般ノ是認スル所ニシテ之全ク細菌的檢索ノ効ニ歸セザルベカラズ。即チ一八八三年デンメ、ゾートレポント氏等始メテ狼瘡組織中ニ結核菌ヲ證明シ、翌年コッホ氏ハ狼瘡ヨリ結核菌ヲ培養セリ且ツ狼瘡組織ヲ動物ニ接種シテ結核ヲ感染セシメ得タリ。次デシユルレル、ヒューテルノ二氏ハ家兎ノ前眼房ニ病的組織ヲ接種シテ陽性ノ成績ヲ得、コルニー、マルチン、ルロアノ諸氏ハ「モルモット」ノ腹腔ニ接種シテ全身結核ヲ起シ得タリ。斯ノ如キ事實アルニモ拘ハラズ狼瘡組織ヨリシテ眞ノ狼瘡ヲ發生セシメ得ザリキ。カボジ―氏ハ之ヲ論據トシテ狼瘡ノ結核性ナリトノ一般ノ承認ニ反對セリト雖ドモ之移植セル材料、毒力ノ相異及ビ動物ノ皮膚ノ狀態其他未知ノ原因ノ存在ニ歸スベキモノニシテ狼瘡ノ原因ヲ否定ス可キモノニ有ラズ。余ハ第廿三例ニ於テ搔爬セル肉芽ヲ以テ二頭ノ健康「モルモット」ノ腹壁皮下ニ接種試験ヲ行ヘルモ陰性ニ終レリ。

今狼瘡發生ノ方法ヲ考フルニ左ノ如キ三個ノ場合アリ。

- (一)、血管淋巴管ニヨリテ遠ク内臓ノ結核性病竈ヨリ或ハ骨淋巴腺ノ結核ヨリ淋巴道ヲ介シテ轉移性ニ來ルモノ。
- (二)、附近ノ淋巴腺、骨等ノ結核性病竈ヨリ接續的ニ來ルモノ。
- (三)、接種ニ因ルモノ。

パウムガルテン氏ノ如キハ血管、淋巴管ニ因ルモノヲ以テ唯一ノ感染經路ト看做セリ。勿論急性傳染病ノ後ニ突發スル多發性狼瘡ノ如キハ明カニ此方法ヲ思考セシムルモノナリ。テイットリヒ氏ハ骨結核ヨリクノ―レス氏ハ淋巴腺結核ヨリ共ニ淋巴道ヲ介シテ來ルコトヲ稱へ、スカッド氏ハ顔面狼瘡ノ三五%ハ實ニ是等ノ方法ニ依ルト云ヘリ。接續的ニ結核性淋巴腺ノ如キガ皮膚ヲ穿破シテ狼瘡結節ヲ形成スルコトモ亦明白ナリ。

接種的ニ發生スルコトノ絶對的確證ハ無ケレドモ狼瘡ハ殊ニ顔面四肢ノ如ク裸出セル部ニ好發シ且ツ其外傷或ハ慢

性濕疹ノ後ニ發生スルコトハ諸家ノ屢々遭遇スル所ニシテ、狼瘡患者ニシテ臨牀的ニ他部ノ結核ヲ否定スルコト多ク、又長ク他部ニ結核症狀ヲ呈セザル者モ有リ。是等ヲ綜合スレバ接種的ニ來ルコトアルハ毫モ疑フ餘地ナシトス。

今余ノ調査例ヲ見ルニ第二例ノ如キハ外傷後ニ發生シ第三、第四及ビ第十二例ハ癩痒性皮膚疹ノ後ニ發生セルモノナリ。ヤダツソン氏ハ接種ヲ以テ最モ多キ型ト看做セリ。然レドモ現今以上三種ノ方法中孰レガ最モ多キヤハ諸家ノ見ル所一致セザルガ如キモ余等ハ接種ヲ以テ最モ多シト信ズ。フリッブソン氏ハ狼瘡ヲバ原發性ト續發性トニ區別シ、原發性トハ全ク健康ナル人ニ來ル局所の疾患ニシテ、續發性トハ小兒期ニ發生シーツハ隣接臟器ヨリ他ハ遠隔セル内臟ノ結核竈ヨリ轉移性ニ發生スルモノナリト云ヘリ。狼瘡ガ種々ノ形ヲ呈スルハ如何ナル理由ニ依ルカハ今日尙明クナラザルモバウムガルテン氏ノ云ヘルガ如ク結核菌ノ數、其毒性及ビ患者ノ體質ニ關スルガ如シ。

本症ガ歐洲ニ比シテ本邦ニ少ナキ理由トシテ土肥氏ハ我國ハ遙ニ南方ニ位シ常ニ強キ日光々線ノ作用ヲ受ケ且ツ皮膚ノ抵抗力ハ白人ニ比シテ遙ニ強キニ由來スト云ヘリ。

狼瘡組織中ノ結核菌ハウ！レンフート氏ノ「アンチホルミン組織融解法」、ムッフ氏ノ結核顆粒染色法ヲ用フレバ最モ確實ニ證明シ得ベシ。

## 八、診 斷

狼瘡ノ定型的ノモノナレバ是ガ診斷ニ毫モ困難ヲ感ゼズ、即チ特有ナル狼瘡疹存在スレバ確實ナリ、潰瘍型ノモノモ其潰瘍ノ性状ヨリシテ比較的容易ニ診斷シ得ルモノニシテ、結核菌ノ證明及ビ培養、動物試驗或ハ組織的檢索ノ如キ毎回常ニ必要ノモノニ有ラズ。殊ニ前二者ノ如キハ屢々陰性ニ終ルコトアリ然レドモ亦類似症ト鑑別ヲ要スル場合モ少ナカラズ。

(一)、護膜腫ハ狼瘡ニ極メテヨク類似スルモ其潰瘍ハ邊緣ニ厚キ浸潤アリ腎臟形ヲ呈シ且ツ堤狀ニ隆起シ、嶮岨ナリ、

殊ニ癩痕中ニ丘疹ヲ再發セズ、好ンデ骨質ヲ犯シ、軟骨ニ及ブコト稀レニ且ツ壯年以後ニ多ク、ワ氏反應陽性ナリ。  
 (二)、癌腫ニ於テハ潰瘍ノ邊緣ニ固キ浸潤アリ、老年期ニ發生シ、且ツ經過惡性ニシテ組織的検査ニ據リ確實ニ鑑別シ得ベシ。

(三)、皮膚疣狀結核、疣狀狼瘡ナルモノト極メテ類似スルモ皮膚疣狀結核ニハ狼瘡疹ノ存在ナク且ツ潰瘍ヲ作ルコトナク乾酪竈殊ニ多ク存在シ好ンデ四肢ヲ侵シ成年ニ比較的多シ。

(四)、皮膚腺病ハ部位固有ニシテ腫瘍ニ波動アリ、潰瘍ノ邊緣薄ク、縁下潜蝕ヲ有シ、且ツ過敏性ニシテ多ク附近ニ原發結核竈ヲ認ム。

(五)、紅斑性狼瘡ハ中央癩痕様萎縮ヲ呈シ、邊緣ハ鮮紅色ニシテ殊ニ左右相對的ニ發生シ、皮疹ノ表面ニハ薄キ鱗屑ヲ生ズ。之ヲ剝離スレバ圓錐形ノ突起ヲ有シ、修開セル毛囊孔ニ楔入ス。且ツ本症ハ決シテ濕潤潰瘍ヲ形成セズ。

(六)、癩ハ神經肥厚、知覺麻痺等アリテ、容易ニ鑑別シ得ベシ。

(七)、慢性濕疹ハ一進一退シ濕潤スルモ潰瘍、癩痕ヲ形成セズ。劇甚ナル癢痒ヲ伴フ。

(八)、酒齶ハ血管擴張ニヨリテ瀰蔓性ニ潮紅スルモ潰瘍癩痕ヲ作ラズ、殊ニ寒暖ノ劇變或ハ飲酒後ニ潮紅著明トナル。

(九)、乾癬ハ潰瘍ヲ作ラズ癩痕ヲ遺サズ殊ニ肘及ビ膝關節ノ伸展側ニ好發ス。

## 九、豫 後

蔓延ノ程度感染ノ方法及ビ局所ニヨリテ差異アリ、接種狼瘡ニシテ病層狹小ナルモノハ切除シ易ク、從ツテ治癒ヲ見ルコト容易ナリ。四肢ノ如キハ病機ノ腱、骨膜、骨ヲ侵シタル場合ニモ尙四肢ヲ切斷スレバ根治シ得ベシト雖ドモ病竈廣大ニシテ或ハ深層ヲ犯シテ切除ノ困難ナルモノ或ハ粘膜殊ニ鼻腔淚鼻管喉頭等ヲ侵スモノハ根治療法ヲ行フコトヲ得ズ、爲メニ反復再發ス。本症ガ皮膚ノミニ限局スル時ハ生命ニ危險ナキモ長キ經過中内臟等ニ轉移スルコトア

リテ豫後ヲ定ムルニ注意ヲ要スルモノナリ。  
狼瘡癬痕ヨリ瘤腫若クハ皮角ヲ發生スルコトアリ。

## 十、療 法

現今應用セラル、療法ヲ大別スレバ外科的療法、理學的療法及ビ藥物の療法ノ三種ナリ。

### (一)、外科的療法。

狼瘡ハ多クノ場合局所的疾患ナルヲ以テ全狼瘡電ヲ除去スルヲ以テ根治手術トナス。

(a)、切除法。病竈淺小ニシテ容易ニ除去シ得ベキ時ハ切除法ヲ行フヲ以テ良トス。然レドモ美容的關係アルヲ以

テ創面ノ廣汎ナル場合ハチーリツユ氏法又ハクラウゼ氏法ニヨリテ殖皮術ヲ行フカ或ハ有皮瓣ヲ作りテ之ヲ被フベシ  
(ランク氏)。一九一〇年ラング氏ノ伯林ニ開催セラレタル狼瘡分科學會ニ於ケル報告ニ依レバ三〇八例ノ狼瘡患者中  
一回ノ手術ニヨリテ全治セルモノノ二五六例ナリキト云フ。

(b)、搔爬燒灼法。患部廣汎ニシテ截去ノ困難ナルカ或ハ不可能ナル場合ニハ銳匙ヲ以テ充分ニ搔爬シ、熔白金或  
ハ電氣燒灼器等ヲ以テ燒灼スベシ。

### (二)、理學的療法。

本療法トシテ今日稱用サルル主ナルモノハフィンゼン氏炭素弧光燈、レントゲン線裝置、水銀石英燈、「ラヂウム」等  
ナリ。

(a)、フィンゼン氏炭素弧光燈。フィンゼン燈ハ一八九六年コーベンハーゲンノフィンゼン氏ニヨリテ始メテ用ヒラ

レシモノニシテ其方法ハ豫メ硼酸水ヲ浸セル綿花ヲ以テ患部ノ周圍ヲ被覆シ温熱ヲ防ギ、次ニ壓迫鏡ヲ以テ充分ニ壓  
抵シ、常ニ光線ヲシテ鏡面ニ直角ニ落下セシムル様ニシ、毎回七十分以上照射スルナリ。本療法ノ奏効ハ最モ確實

ニシテ之ニヨリテ治療セシ狼瘡ノ癩痕ハ平滑ニシテ美貌的ナルコト他ノ療法ノ遠ク及ブ所ニアラズ。然レドモ數月乃至數年ノ治療日數ヲ要スルヲ困難トス。フィンゼン燈ハ其規模稍々大ニ過グルヲ以テ其後フィンゼン、ライン燈ナル小装置考案セラレ治療上ニ應用セラル。

(b)、レントゲン線。レントゲン線モ亦狼瘡ニ對シテ著効アリ。一八九五年レントゲン氏X線ヲ發見シ、次デキュンメル氏ハ一八九七年始メテ之ヲ尋常性狼瘡ニ應用セリ。以來其報告多シ。本邦ニテハ一九〇六年遠山氏ニヨリテ始メテ應用セラレ、次デ土肥章司氏ハシユルツ氏第二放射式ヲ以テ本症ヲ治療シ、藤浪氏ハフィンゼン療法ノ前療法トシテ著効アルコトヲ述ベタリ。其他佐藤氏等ノ報告モアリ。殊ニレントゲン線ハ増殖性或ハ乳嘴狀又ハ表在性潰瘍性ノモノニ對シテ有効ナリ。扁平ニシテ潰瘍ヲ作ルモノハフィンゼン燈ト併用スルヲ良トス。

(c)、水銀石英燈。クロマイエル氏ノ水銀石英燈ヨリ發スル化學的光線ノ深達力ハフィンゼン氏燈ニ比スレバ三倍乃至五倍ナリト云フ。而シテ其方法ハ青窓ヲ用ヒ壓抵照射法ニヨリテ二十分間乃至六十分間ニ涉リテ患部ヲ照射シ爲メニ起ル反應性皮膚炎ノ消退スルヲ待チテ次回ノ照射ヲ行フナリ。然ル時ハ間々著効アリト云フ。

(d)、「ラヂウム」及ビ「メゾトリウム」。一九〇〇年ストレーベル及ビダンロー氏等始メテ「ラヂウム」ヲ狼瘡ノ治療ニ應用シ、爾來諸家ノ實驗アリ。而シテ「ラヂウム」ハ割合ニ頑固ナルモノニ効多ク、「メゾトリウム」ハ破壊ノ目的ニ於テ「ラヂウム」ニ勝ル。

(e)、雪狀炭酸。ゲーブハルト氏一八八五年初メテ狼瘡ニ寒冷ヲ作用シ、次デブセー氏ハ雪狀炭酸ヲ皮膚疾患ニ應用シテ治療上多大ノ効果ト進歩ト齎シテヨリ之ヲ狼瘡ニ用フルモノ出デタリ。然レドモ期待スベキ効果ナク僅カニ「ラヂウム」ト併用セラルルノミナリ。

(f)、其他人工太陽。「エオジン光線療法或ハ電氣分解法等モ亦應用セラル。

### (三)、藥物的療法。

姑息的ナレド一時ノ治癒ヲ營ミ得ベク、理學的及ビ外科的療法ニ伍用シテ其効ヲ佐クベシ。

(a)、組織腐蝕療法。 狼瘡腐蝕ノ目的ヲ以テ現今最も多ク用ヒラルハヤーリ、ユ氏ノ推賞セル「ピロガルス酸ナリ。其特長トスル所ハ或ル時間内ニ於テ單ニ狼瘡組織ノミヲ崩壞シ、周圍ノ反應ノ甚ダ僅微ナルニアリ。「ピロガルス酸ハ普通單軟膏ト共ニ五乃至二〇%ノ軟膏ヲ作り、之ヲ布片ニ厚ク延シテ患部ニ貼用ス。而シテ一日二回交換シ、是ヲ用ヒタル部分ノ褐色ニ變ジテ膨隆スルマデ用ヒ、次デ緩和ナル軟膏ヲ貼用スベシ。之ニヨリテ狼瘡組織ヲ破壞シ持續的ノ治癒ヲ營マシ得ルモノナリ。余等ハ毎回本療法ヲ行ヒテ著効アルヲ實驗セリ。亞砒酸モ亦腐蝕作用アレド其毒性強ク爲メニ廣汎ナル部面ニ用ヒ難シ。

又ランデル氏ハ硅酸ノ局所的療法ヲ推賞セリ、其他格魯兒アンチモン水、三鹽化醋酸、「レゾルチン」、「バルバルサム」、水銀劑等モ用ヒラル。

(b)、「ツベルクリン療法。 舊ツベルクリン」ハ十分ノ一密瓦ヨリ始メテ三日目毎ニ注射シ漸時增量シテ十密瓦ニ至ル。新ツベルクリン」ハ五分ノ一密瓦ヨリ始メテ二日乃至數日ノ間隔ヲオキテ漸次增量ス。最新ツベルクリン」ハ二分ノ一密瓦ヨリ始ム。無蛋白ツベルクリン」ハ舊ツベルクリン」ニ準ズ。

以上ノ「ツベルクリン療法ハ一時的ノ効果アルモ完全ニ治癒セシムルコト能ハズ現今ハ他ノ療法ト併用セララルノミナリ、其他「ツベルクリン軟膏トシテ用フル者アレドモ同様ナリ。

(c)、自家血清療法。 近來自家血清ヲ用ヒテ狼瘡ノ療法ニ進歩ヲ促シタリトノ報告アルモ本療法ハ最初ハ多少有効ニ作用スルガ如クナルモ其後反復注射スルモ著シキ變化ヲ見ザルガ如シ。

(d)、「カルチウム」療法。 鹽化カルチウム、沃度カルチウム」等ノ注射ガ多少有効ニ作用スルコトアルヲ以テ試ミテ可ナリ。

(e)、其他稀レニ堇青、「スクレイン」等ノ皮下注射二%ノ過マンガン酸加里ノ濕布等モ用ヒラル。

又粘膜狼瘡ニハ度々沃度丁幾、「ヨードグリセリン」、三乃至五%沃度ホルムググリセリン、乳酸、カボジー氏ノ強「ラービス溶液等ヲ長ク適當ニ應用スル時ハ有効ニ作用スベシ。近來又「ピチロール」ノ有効ナリト云フ報告アリ。之ヲ要スルニ狼瘡ハ局所ノ疾患ナルヲ以テ前述ノ如キ療法ヲ適當ニ應用スルコトニヨリテ治癒セシメ得ルモノナリト雖ドモ一般療法ノ見解ヨリシテ對腺病質劑及ビ強壯劑推賞セラル、即チ羸瘦貧血ニハ肝油鐵劑砒素劑ヲ用ヒ、淋巴腺腫脹ニハ沃度劑ヲ應用ス、且ツ勉メテ衛生的生活ヲ營マシムベシ。

## 十一、結 論

以上記載スル所ヲ概括スレバ大要次ノ如シ。

- 一、大正二年ヨリ大正九年ニ至ル八ケ年間ニ於ケル我教室ノ外來患者總數ハ一萬七千三百九十八名ニシテ、其内尋常性狼瘡患者二十三名ヲ得タリ、即チ〇・三三二%ニ相當ス。
- 二、發生年齡ハ廿歲以前ノ少年者ニ多クシテ七四%ヲ占ム。
- 三、男女性ノ關係ハ女子ニ多ク二對一ノ比ヲナセリ。
- 四、發生部位。 顔面最モ多クシテ十七例ヲ占メ次デ上肢、頸部、下肢、胸部ノ順序ナリ。而シテ女子ニ於テハ殊ニ顔面ニ多ク四肢ハ稍々男子ニ多ク見タリ。之我國ノ婦女子ハ外出シテ日光々線ニ觸ルルコト男子ニ比シテ遙ニ少ナク從ツテ皮膚ノ抵抗力弱キニ因ルナランカ、而シテ男子ノ四肢ニ多キハ職業上外傷ヲ受タルコト多キニ因ルベシ。
- 五、經過ハ一年乃至十年ノモノ最多ク十六例ヲ占メタリ。而シテ最モ長キハ實ニ五十年ニ及ベリ。
- 六、結核性素因ノ明瞭ナリシモノ四例ニ過ギズシテ十二例ハ全ク素因ヲ認メザリキ。
- 七、結核性合併症ノ臨牀上證明シ得タルモノ六例ニ過ギズ。
- 八、組織的所見。 主要ナル變化ハ真皮層ニシテ單核圓形細胞ノ浸潤アリ、内ニ多數ノ上皮様細胞及ビ數個ノ巨大



細胞ヲ認メタリ。而シテ第四例及ビ第十二例ハ病竈稍々明劃ナリシモ他ノ三例ハ其境界不明瞭ニシテ瀰蔓性浸潤狀ヲ呈セリ。

九、治療ノ成績。全治セルモノ九例ニシテ三九%ヲ占メ、殆ンド全治セルモノ六例、變化ナキモノ一例。再發一例。死亡一例。放置セルモノ五例ニシテ治療上ノ豫後ノ良効ナルヲ認メタリ。

十、治療法。切除法、搔爬燒灼法、ビロガルス酸腐蝕法ヲ適當ニ應用スルコトノ最モ簡單ニシテ效果ノ多大ナルヲ信ズ。(理學的療法ノ設備不完全ニシテ之ヲ充分應用シ得ザリシヲ遺憾トス)。

擱筆スルニ臨ミ本問題ノ調査報告ヲ命ゼラレ、終始懇篤ナル御指導ヲ賜ハリシ恩師土肥先生ニ謹ミテ感謝ノ意ヲ表シ併テ同僚先輩諸兄ノ御厚意ヲ謝ス。

### 参 考 書 目

- 1) **Joseph**, Hautkrankheiten. 1910.
- 2) **Ehrmann u. Fick**, Compendium der speziellen Histopathologie der Haut. 1906.
- 3) **Unna**, Histopathologie der Hautkrankheiten. 1894.
- 4) **Jesionek**, Praktische Ergebnisse auf dem Gebiete der Haut- und Geschlechtskrankheiten. 1914.
- 5) **Unna u. Bloock**, Die Praxis der Hautkrankheiten. 1908.
- 6) **Riecke**, Lehrbuch der Haut- und Geschlechtskrankheiten. 1914.
- 7) **Jarisch**, Hautkrankheiten. 1900.
- 8) **Jacobi**, Atlas der Hautkrankheiten. 1904.
- 9) **Mracek**, Handbuch der Hautkrankheiten. 1900. Archiv f. D. u. S. Bd. 57. S. 193. 1901.
- 10) **Buschke**, Über die Radikalexcision des Lupus. Archiv f. D. u. S. Bd. 47. S. 23. 1899.
- 11) **Ashihara**, Über das Lupus-Karzinom. Archiv f. D. u. S. Bd. 67. S. 73. 1903.
- 12) **Phillipson**, Über die Pathogenese des Lupus und ihre Bedeutung über die Behandlung desselben. Archiv f. D. u. S. Bd. 67. S. 73. 1903.
- 13) **Heuck**, Über Tumorbilden den Lupus. Archiv f. D. u. S. Bd. 82. S. 9. 1906.
- 14) **Jungmann**, Über Wert und Bedeutung der operativ-plastischen Injusbildung. Archiv f. D. u. S. Bd. 97. S. 3. 1909.
- 15) **Doutrelepont**, Zur Behandlung des Lupus vulgaris. Archiv f. D. u. S. Bd. 100. S. 191. 1910.
- 16) **Zweig**, Über Lupus-Karzinome. Archiv f. D. u. S. Bd. 102. S. 83. 1910.
- 17) **Stelwagon**, Diseases of the skin. 1916.
- 18) **土肥**, 皮膚科學上卷及下卷。第八版。
- 19) **山田 旭**, 皮膚病診斷及治療法第八版。
- 20) **梅津小次郎**, 皮膚結核。明治四十三年。
- 21) **土肥**, 尋常性狼瘡ノ一例。東京醫學會雜誌第十二卷第十號。明治三十一年。
- 22) **河本**, 眼瞼狼瘡ノ一例。日本眼科學會雜誌第二卷第九號。同上。
- 23) **土肥**, 尋常性狼瘡ノ一例。順天堂病院集談會ニテ報告。明治三十二年。
- 24) **松尾峰次郎**, 顔面狼瘡ニ就テ。東京醫事新誌第一千五百五十三號。明治三十三年。
- 25) **松尾**, 同上追加。同上第一千二百五十六ノ一。一千二百

- 五十七ノ五、明治三十五年。 26) 土肥、尋常性狼瘡ノ療法、皮膚科及泌尿器科雜誌第二卷第四及第五號、同上。 27) 土肥、我國ニ於ケル皮膚結核症附患者ノ説明、同上、第三卷第五號、明治三十六年。 28) 土肥、尋常性狼瘡ノ三例、同上、第三卷第六號。 29) 田中、皮膚結核ノ動物接種ニ就テ、同上、第四卷第六號、明治三十七年。 30) 宮田、本症ノ一例、同上。 31) 中原、本症ノ一例、同上。 32) 遠山、本症ノ一例、同上。 33) 億川、皮膚結核ノ數例、同上、第五卷第二及第三號、明治三十八年。 34) 遠山、本症ノ二例、同上、第五卷第四號。 35) 田中、疣狀狼瘡患者ノ説明、同上。 36) 摺田、本症ノ一例、同上。 37) 櫻根、皮膚結核ニ就テ、同上、第六卷第二號、明治三十九年。 38) 栗田章司、皮膚結核ノ統計、同上。 39) 笹川、本症ノ一例、同上。 40) 宮田、本症ノ一例附動物試驗、同上。 41) 森安、咽頭ニ發生セル尋常性狼瘡ノ一例、同上。 42) 丸尾、眼瞼ニ發生セル尋常性狼瘡ノ一例、同上。 43) 田中、本症ノ二例、同上、第六卷第三及第四號。 44) 青木、本症ノ一例、同上。 45) 土肥、本症ノ一例、同上。 46) 井上、痔瘻ニ續發セル肛圍皮膚疣狀結核兼口唇狼瘡ノ一例、同上。 47) 田中、對稱性狼瘡患者ノ一例、同上、第六卷第五及第六號。 48) 井上、本症ノ一例、同上、第七卷第五及第六號、明治四十年。 49) 楠、本症ノ一例、同上、第七卷第二號。 50) 遠山、皮膚結核ト「レントゲン」光線、同上、第七卷第一號。 51) 井上、狼瘡ニ對スル「バクレン」療法、同上。 52) 大越、尋常性狼瘡ニ對スル「ツバルクリン」軟膏ノ効果ニ就テ、同上、第八卷第五及第六號、明治四十一年。 53) 山田、本症ノ一例、同上、第八卷第二號。 54) 大越、狼瘡ノ療法ニ就テ、同上、第九卷第七號、明治四十二年。 55) 櫻根、結核性皮膚病ノ診斷分類療法ニ就テ、同上、第十卷第五號、明治四十三年。 56) 土肥、百瀬、東京醫科大學皮膚科ニ於ケル十ヶ年間ノ統計上ヨリ見タル皮膚結核、同上。 57) 松本、京都醫科大學ノ結核性皮膚患者ノ統計、同上。 58) 億川、大阪高等醫學校皮膚科ニ於ケル皮膚結核ノ統計、同上。 59) 伊藤、結核ニ於ケル血液研究、同上。 60) 友重、狼瘡ノ組織研究、同上。 61) 長谷川、急性發疹ニ續發セル大人ノ多發性尋常性狼瘡ノ一例、同上、第拾卷第九號。 62) 藤谷、水銀石英燈療法ニヨリテ著明ニ輕快セル尋常性狼瘡ノ數例、同上、第十三卷第十號、大正二年。 63) 螺長、本症ノ四例、同上、第十三卷第八號。 64) 野間、乳嚙様增殖性尋常性狼瘡ノ一例、同上、第十四卷第六號、大正三年。 65) 山口、原發性喉頭狼瘡ノ一例、耳鼻喉科雜誌第十九卷第五號、大正三年。 66) 藤谷、フインゼン氏燈治療中ノ本症ノ數例、皮膚科及泌尿器科雜誌第十四卷第八號、大正三年。 67) 藤谷、「ラゲウム」及「メゾトリウム」ニヨリ大イニ輕快セル尋常性狼瘡ノ數例、同上、第十四卷第十號。 68) 松尾、本症ノ一例、同上、第十四卷第十一號。 69) 高橋、尋常性狼瘡兼「スピナウエントーザ」患者ノ一例、同上、第十四卷第四號。 70) 佐藤、皮膚科ニ於ケル「レントゲン」療法ノ成績第一回報告、同上、第十四卷第五號。 71) 佐藤、太田、三戸、皮膚科ニ於ケル「レントゲン」療法ノ成績第二回報告、同上、第十四卷第十二號。 72) 栗田得三、足趾尋常性狼瘡ノ一例、同上、第十五卷第八號、大正四年。 73) 藤谷、中山、人工太陽ノ皮膚科ニ於ケル應用、同上、第十五卷第三號。 74) 藤谷、中山、廣瀬、水銀石英燈ノ治療報告、同上、第十五卷第七號。 75) 川本、本症ノ一例、同上、第十六號第十一號、大正五年。 76) 兒玉、本症ノ一例、同上、第十七卷第七號、大正六年。 77) 栃木、本症ノ一例、同上、第十七卷第八號。 78) 篠本、手背ニ發生セル尋常性狼瘡ノ一例、同上、第十七卷第十號。 79) 松浦、皮膚結核治療劑トシテノ「ピチロール」、土肥氏二十五年祝賀論文集、大正六年。 80) 土肥、佐

- 藤、中川、「ラヂウム」療法ノ適應症ニ就テ、皮膚科及泌尿器科雜誌第十七卷第五號。 81) 筒井八百珠、尋常性狼瘡、岡山醫學會雜誌第三百二十一號、大正五年。 82) 廣瀨、「ラヂウム」療法ヲ施セル尋常性狼瘡ノ二例、皮膚科及泌尿器科雜誌第十八卷第二號、大正七年。 83) 篠本、理學的療法ヲ施セル尋常性狼瘡ノ一例、同上。 84) 坂本、自家血清療法及放射線療法ヲ施セル尋常性狼瘡ノ三例、同上、第十八卷第十號。 85) 篠本、皮膚結核ノ療法、醫事新聞第一千號、大正七年。 86) 百瀨、川原、自家血清療法ニ就テ、皮膚科及泌尿器科雜誌第十八卷第七號、大正七年。 87) 信田、本症ノ一例、同上、第十八卷第十號。 88) 五島、播種狀尋常性狼瘡ノ一例、同上、第十八卷第十一號。 89) 柳原、雪狀炭酸療法ニ就テ、臨牀醫報第六年第四號、大正七年。 90) 寺田、尋常性狼瘡ノ三例、皮膚科及泌尿器科雜誌第十九卷第一號、大正八年。 91) 岡野、本症ノ一例、同上、第十九卷第三號。 92) 廣瀨、篠本、尋常性狼瘡ノ「ラヂウム」ニヨル治驗例、同上、第十九卷第五號。 93) 石田、本症ノ二例、同上、第十九卷第九號。 94) 廣田、自家血清療法ヲ施セル尋常性狼瘡ノ一例、同上、第十九卷第二號。 95) 藁根、野口、谷村、泌尿生殖器及ビ皮膚結核ニ就テ、同上、第十九卷第五號。 96) 柳原、皮膚結核ノ血管ニ對スル態度、同上。 97) 廣瀨、篠本、皮膚結核ノ「レントゲン」療法ニ就テ、同上。 98) 柳原、皮膚結核ノ日光々線療法、同上。 99) 藤谷、皮膚結核ニ於ケル「ピチロール」ノ効果ニ就テ、同上。 100) 井尻、皮膚結核ニ就テ、同上。 101) 橋本、口唇及ビ口腔粘膜炎ノ一例、同上、第十九卷第一號。 102) 松本、本症ノ二例、同上、第二十卷第四號、大正九年。 103) 土肥章司、血清療法、同上、第二十卷第八號。 104) 田代榮、尋常性狼瘡ノ治驗、同上、第二十卷第十一號。 105) 小原 集三、本症ノ一例、十全會雜誌第十八卷第十號、大正二年。 106) 旭、皮膚及ビ泌尿器結核ニ就テ、近世醫學第二卷第四號及第五號、大正四年。 107) 高岡、雪狀炭酸治療知見、福岡醫科大學皮膚科開講十周年誌、大正五年。 108) 土肥、日本皮膚病微毒圖譜第一表及圖解。